

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 望月 雄介

論文題目 中国語初対面会話の談話分析
—発話レベルから相互行為レベルへのポライトネス—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学准教授	勝川 裕子
委 員	名古屋大学教授	丸尾 誠
委 員	名古屋大学教授	杉村 泰
委 員	名古屋大学准教授	俵山 雄司

論文審査の結果の要旨

論文の意義

本論文は、中国語初対面会話における話し手と聞き手による相互行為（interaction）について談話分析の手法を用いて考察したものであり、自己開示（第3章）、あいづち（第4章）、前提情報の挿入（第5章）といった言語事象を取り上げ、会話の継続、展開という観点から中国語初対面会話におけるポライトネスのあり方について分析したものである。本論文で扱った690分間に及ぶ会話データは、執筆者（望月雄介氏）が実際に現地で録音・録画収集したものであり、膨大なデータを文字化し、コーディングした上で行われた質的・量的分析は、中国語における初対面会話の実態を克明に記述したものであると評価できる。

ポライトネス研究に関しては、これまで単文、あるいは短い対話文における話し手の発話を対象とした研究が主流であった。これに対し、本論文では、このような従来のポライトネス理論が抱える問題点を指摘した上で、話し手の発話だけでなく、聞き手の反応や応答、並びに双方向による情報交換までを対象とした「相互行為レベル」におけるポライトネスを考察する重要性について主張している。言語行動に丁寧さを求めないポライトネスや聞き手のポライトネスといった概念を打ち出すことで、初対面会話における「配慮」の実態を多面的に記述した本論文は、ポライトネス研究に一石を投じるものであり、中国語教育においても貢献が期待される。

論文の概要

望月氏の博士論文は序章、終章を含む全8章で構成されている。

第1章では、まず初対面会話の特質について論じている。会話参加者は互いに相手に関する情報を共有していないことから、通常、初対面会話には緊張感が伴う。本章では、初対面会話において人はなぜ不安を感じるのかについて考察し、会話参加者の人数、性別、年齢、社会的立場といった要素を挙げながらその特質について論じている。また、これまでのポライトネス理論の主流とも言えるストラテジー中心のポライトネス理論と「わきまえ」中心のポライトネス理論を概観し、両者に関する評価と問題点を明確にした上で、両ポライトネス理論を相互補完的に踏まえた新たなポライトネス理論を確立する必要性を主張している。

第2章では、本論文で使用する会話データの収集方法、並びに年齢、学年、出身地、専門分野といった調査協力者の情報を示し、さらに調査協力者に対して行ったフォローアップ・インタビューの実施方法について記載している。本論文が使用するトランスクリプションに関しては、文字化の方法、文字化の規則、発話文の認定方法を提示し、また、量的分析に必要なコーディングと集計方法を示している。

第3章では、会話参加者による自己開示について分析している。まず、自己開示の下位類である「自己紹介」において選択されやすい話題について考察した結果、中国人学生は自己紹介

の場面で、個人に関する客観的情報（自身の氏名、年齢、方言、民族等）よりも、会話参加者の共通基盤である学校生活に関連する情報（所属、学年、専門分野、卒業校等）を優先的に開示することを示している。さらに、中国人学生は自己紹介の中で相手の所属、学年といった属性を確認すると同時に、互いの出身地を開示することで共通の話題を模索しており、出身地に関する話題がこれまでにいった場所等の話題に連鎖するケースが多く観察されたことから、会話の継続及び展開において、出身地の開示が機能していると述べている。

第4章では、聞き手の言語行動という観点から、初対面会話において打たれるあいづちに着目して考察を行っている。ここでは発話を、話し手と聞き手が情報要求と情報提供を繰り返しながら会話を進行する「インタラクティブ・スタイル」(interactive style) と、話し手がまとまった情報を伝える「テリング・スタイル」(telling style) という2つのスタイルに大別し、各スタイルに現れるあいづちの特性について考察している。会話データからは、会話参加者はテリング・スタイルにおいて聞き手役に徹する際にあいづちを多く打つ傾向にあることが観察されたことから、あいづちは円滑に会話を継続、展開させるための聞き手の配慮であり、聞き手のポライトネスとして捉えるのが妥当であると結論付けている。

第5章では、現代中国語の語気詞“嘛”に着目し、話し手が前提情報を挿入する際に用いる“嘛”の用法、並びに前提情報挿入直後の聞き手の行動について考察している。分析の結果、“嘛”を伴うフレーズは、話し手がこれから話そうとする話題を展開するにあたり聞き手が知っておくべき情報として挿入されるものであり、話し手がこれを事前に示すことで会話の継続、展開を円滑にする役割があることを明らかにしている。また、相互行為レベルにおいては、話し手が“嘛”を用いて前提情報を挿入した直後に、聞き手があいづちを打つケースが多く観察されたことから、語気詞“嘛”は話し手が挿入した前提情報が聞き手に共有されていることを確認する役割を果たすものであると主張している。

続く第6章では、これまでのポライトネス理論における問題点を述べた上で、第3章から第5章で行った考察に基づき、会話の継続、展開にみられるポライトネスを再検討している。自己開示（第3章）における配慮行動としては、学校生活に関連する社会的領域の情報が趣味、嗜好といった私的領域の情報より優先的に開示されることから、会話参加者は対人的配慮だけでなく、開示情報の内容や開示順序、話題の展開に対しても配慮していることを指摘している。次に、あいづち（第4章）における配慮行動としては、聞き手は特定の発話スタイルにおいて一定の規則に則ってあいづちを打っていることから、このような聞き手としての配慮行動を話し手の配慮行動と同等に扱うべきであると主張し、話し手としての配慮行動を「話し手のポライトネス」(speaker's politeness)、聞き手としての配慮行動を「聞き手のポライトネス」(listener's politeness) として論じている。これら2つの概念は、発話レベルのポライトネスの枠組みを越え、話し手と聞き手それぞれにおける対人的配慮と対場の配慮の観察を可能にしている。最後に、前提情報の挿入（第5章）における配慮行動としては、話し手が“嘛”を用いて前提情報を挿入し聞き手との共通背景を構築するのは、挿入された前提情報直後の話を聞き

手が理解しやすくするための配慮であると指摘し、一方で、話し手が“嘛”を使用して前提情報を挿入した直後に、聞き手があいづちを打つ傾向にあることから、このような「応答」も聞き手のポライトネスとして捉え得ると主張している。

最後に終章では、各章の考察結果に基づいて、中国語初対面会話における話し手、聞き手の相互行為の様相を体系的に示している。また、これまでポライトネス理論の主流であったポライトネス・ストラテジーはポライトネスの一部にすぎず、ポライトネスの全体像を捉えるためには、話し手だけでなく、聞き手のポライトネスや「場」に対するポライトネス、コンテキストを含めた相互行為という観点が必要であると結論付けている。

論文審査委員会による審査及び合否判定

口述試験では、学位申請者から博士論文の概要説明が行われた後、審査委員からそれぞれにコメント及び質問がなされ、学位申請者との間で詳細な質疑応答が行われた。

審査委員から寄せられた主な指摘、質問、コメントを以下に記す。

各章における考察、特にあいづちと語りのスタイルの関連性（第4章）や語気詞“嘛”と情報挿入との関連性（第5章）に関する指摘は有益であり一定の評価ができるものの、中国語初対面会話という場面に特化した分析結果であるとは言い難く、初対面会話と分析結果の関連性が弱いという指摘がなされた。また、本論文で用いた会話データは自然会話とはいえ人為的に設定された初対面会話であり、この設定の特異性が自己開示（第3章）における話題選択に影響を与えている可能性があることが指摘された。加えて、本論文第6章において提起されたポライトネスの概念は、各章における分析結果とポライトネスとの関わりを適切に総括しているものの、新たなポライトネス理論を構築できたかという点には疑問が残ると言わざるを得ない。本論文は豊富な会話データを用いて、一つ一つ丹念に分析を積み重ねていくその手法が評価される一方で、理論的枠組みとしての新たなポライトネスを構築する作業については、一層の精緻化が必要である。

このような不備不足や改善点、今後の検討課題などが指摘されたものの、本論文は豊富な会話データに基づき、相互行為レベルでポライトネスを捉えることで、話し手だけでなく聞き手の配慮や「場」が要求する配慮など、中国語初対面会話におけるポライトネスを多面的・多角的に記述している点に独創性を見出すことが可能であり、今後さらなる発展を期待できる論文であることが確認された。

以上の評価から、審査委員が全員一致して、本論文は博士學位論文として十分にその水準に達していると判断した。したがって、本論文を合格とした。